

赤い血を白い乳に変える牛…酪農は不思議がいっぱい —ふるさと講座に参加して— 植田 喜代子

“牛飼いになりたい”という夫の夢に相乗りし、就農地を探し歩いたすえ、現在地に腰を据えたのは昭和 51 年のこと。「農業家の子弟でないと農業者になれない」と、どこへ行っても門前払いでしたので、それなりの覚悟はしていたものの、「蛇口をひねっても水が出ない」「冷蔵庫が空っぽ」と、生活面での覚悟の甘さには堪えませんでした。なにしろ食べたい物がすぐそばにある都会(?)で生まれ、「食べる」ことに思いをめぐらすことなどなく育っていましたから。

そんな私が「食べる」ことに思いをめぐらせるようになったのは、ある食のイベントとの関わりがあったからです。平成 17 年の第 20 回開催をもって終了した「ふれあいラウンド・テーブル」—地元食材で作った料理を囲んで、世代を越えて交流しようというイベントでした。伝統食から我が家自慢の漬物、フレンチやイタリアンに変身したおなじみの食材がテーブルを賑わし、「ほっけのすり身づくり」実演では、浜の母さんの包丁技を憧れをもって見つめていたものです。

なかでも私を惹きつけたのは、戦後の食糧難、経済的にもひっ迫する中で、何を食べ、苦境から抜け出るために何をしたかという経験談でした。「お腹いっぱい食べたい」という願いが、漁師ながら豚を飼育するといった裏ワザ(?)を広めたり、大規模の水田地帯をつくろうと国営事業を展開させたという史実。まさしく「食べる」ことは「生きる」ことだと、私自身の生きる姿勢を問われた思いがしました。

漁業はホタテやかきの養殖への転換で活況を呈し、水田はその面影もなく畑となった昨今、酪農はいつ頃、どんなふうが始まったのか、現役牛飼いとしては興味津々で、町史をひも解いてびっくりでした。乳製品が米ほど身近でなかった故か、華々しさはないものの、なつのじいちゃん柴田泰樹が、ここにも存在していたのです。そして、その魂が受け継がれてきたかはともかく、今や日本屈指の酪農地帯となったこと、今回の企画で認識することができました。

酪農は不思議がいっぱいです。草という植物を食べ、動物性の乳を提供してくれる「牛」。赤い血を白い乳に変えてくれる「牛」。そんな命ある「牛」と人間の、いわば共同作業が酪農。それは、きっと“柴田泰樹じいちゃん”の時代から、何も変わっていない、はずです。

乳牛の飼育頭数が何番目に多いとか、売上高がすごい(あまり実感されてこなかったようですが)とか、確かにそれはすごい事だけれど、本当に知ってもらいたいことは・・・これからの企画で知ってもらえれば嬉しいです。

永遠にナゾが解けない“酪農”という仕事を選んだこと、ちょっと誇りに思いながら、今回の企画に感謝して“感想”とさせていただきます。

(東芭露在住 植田喜代子 酪農家)

“酪農”という仕事を
選んだこと
ちょっと誇りに
思いながら…



<参加者アンケートから～感想>

<設問5 “ご意見、ご感想、ご要望があれば何でもお書きください” >

- 初めて知ることばかりでとても勉強になりました。湧別町が「酪農の町」であること、そこまでのイメージはなかったので、おどろきました。酪農家が減少していく中で、生産量を増やすための対策はとても難しいこともわかりました。みなさんの熱い思いを聞くことができました。【30代女性】
- 湧別の酪農の現状や日本の現状、世界の酪農に関することが少しだけ理解できた気がします。増田悦郎さんのお話が特に面白く講座をきくことができ、とても良かったと思いました。ふたまた出荷の今後の行方が気になります。若者の就職の選択肢として、酪農をはじめ第一次産業に対する情報が広がれば良いと思いました。牛乳を飲むとき、乳製品をつかうときに友澤さんのお話を思い出しそうです。【40代】
- バスツアー参加したかったです。また企画して下さい。【50代男性】
- とても有意義な時間でした。特に松浦さん、増田さんの話が奥深いものを感じました。【60代男性】
- 非常におもしろかった。講師の選任も良かった。JA組合長の乳価の仕組みの説明が良かった。松浦さん頑張って下さい。サイレーヂ「サイロ」いいですね。【70代男性】
- 現在の湧別の酪農の事で、現在になるまでの歴史を知る事が出来ました。【40代男性】
- 第一次産業の魅力がこんなにある湧別町は、これから可能性“大”だと思います。【20代男性】
- 昔と現代の酪農が変わってきた中で、変化の違いを感じることができました。ありがとうございました。【20代女性】
- 大変勉強になりました。身近であっても、わからないこと、変化していること、話で聞いていたこととあわせて農家さんの人々のことが少しわかりました。【40代女性】
- 若い人が働いていける事業になってほしい。分業化、コントラ事業、TMRセンターとてもよい事だと思います。【70代女性】
- 今回のお話は、酪農を産業としての視点からのものが多かったように思います。牛の数が、人口の2倍の湧別町では、酪農の関係者はもちろんですが、町内全体にとっても深く関わる事だと思います。その意味からの視点を深掘りすることも大事だと思います。

① 牧場の6次化は、できる方はどんどん取り組まなくては、と思いますが、JAが中心とした取り組みは、必要と感じました。(オール湧別町の考えが取れないか。そうすれば酪農の2次化が進むと思います ⇒ 関わる町民が増える)



② 後を継ぐ人が減るのが酪農の問題の大きいもの ⇒ これもオール湧別の取り組みが必要

(PR→受け入れ→就農の流れを効果的に実現する) 【60代男性】



- 酪農について様々な観点から学ばせていただきました。ありがとうございました。

【50代男性】

- 湧別町の酪農が理解できた。【60代男性】
- 自分も酪農家なので、情報として新しいものは無い訳ですが、現状を町民に知ってもらう良い機会だと思いました。将来に向けては、法人経営、個人経営がしっかりバランスよく点在する様に願っています。【60代男性】
- 湧別町における畜産の取扱高の割合の高さを数値（1次産業の約4割）で確認でき、畜産の重要性を再認識することができました。酪農家戸数や頭数がプレゼンする方によって異なっていたので、予め数値を統一した方が分かり易いと感じました。発表者（プレゼンする方）の都合もあるので難しいとは思いますが…。【20代男性】
- 音声が不安定だったのが残念!!【60代女性】
- 御苦労様でした。【60代男性】



講師の方々(左から野田、増田、松浦、友澤さん)

「大成舎」から半世紀

「酪農に冷害なし」の合言葉で～湧別・酪農のあゆみ～

湧別で牛が飼われたのは、明治20年（1887）徳弘正輝が網走から牛7頭を導入して、湧別川畔に放牧したのが最初といわれ、搾乳が目的というより、肉畜的な要素が強かったという。

湧別で、乳肉兼用的な飼養から、酪農生産に着目して乳牛飼育を始めたのは、芭露の内山牧場（支配人・大口丑松）だった。明治42年（1909）、内山牧場は、牧場開設と同時に、卯原内の牧場からホルスタイン雑種1頭を160円で買い入れた。内山牧場は、乳牛の増殖に取り組み、大正5年（1916）、生乳販売牧場「大成舎」を開き、生乳販売（管理人・島田梅十）を行った。大成舎は、常に7、8頭の飼育搾乳を行い、牛乳の販売は、湧別市街にとどまらず、中湧別や遠軽、留辺蘂方面にもおよび、日量最高5斗（一升瓶50本）を直販したという。

湧別町で本格的に酪農が行われるようになったのは、戦後、昭和30年代に入ってからで、「3年に一度は、冷害凶作になる」寒冷地の暮らしの中、昭和39年（1964）の秋、東部落では、水田の全面廃耕を部落の臨時総会で議決し、「酪農に冷害なし」の合言葉の下、酪農専業へ転換した。（当時の様子は、「寒冷地帯～北海道冷害農民の記録」として、昭和39年11月27日、NHKで放送された。このビデオは、湧別図書館で閲覧できる。）（U

（資料 「湧別町百年史（昭57刊）」「風雪に耐えて、東百十年史（平18刊）」）

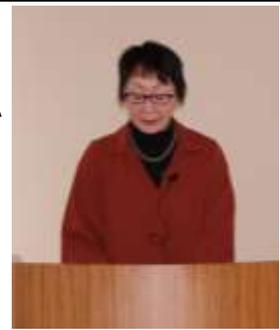


内山牧場の徳を称える碑

第9回ふるさと講座「酪農」

「酪農を夢見て北海道へ」の講演を終えて

松浦三代紀



ふるさとから学ぶ会代表の梅田さんから、講師の依頼を受けたのは8月の中旬だったと記憶しています。酪農に携わっている現場から、その思いを話してくださいということでした。

現場から町民の方たちに酪農を知っていただくには、どんな形で話をしたらいいだろうかと考えた時、思いついたのは酪農にあこがれて短大に進学し、牧場で実習を始めた頃の驚きや感動。そして、酪農家に嫁いで仕事をやっていく中での、酪農に対しての思いの変化などを、今まで書きためたエッセーを紹介しながら、話してみようと思いました。

先進的な大規模農家がもてはやされる現代にあつて、義父の時代から変わらず放牧酪農を続けている我が牧場は、時として時代遅れの感があります。が、義父母と祖母がやっていた頃も、私達夫婦が行っていることも、これから息子夫婦がやるであろうことも、その時々で家族で話し合い、試行錯誤しながら最善のやり方だと確信し、経営に努めています。

母校の建学の精神である「健土健民」—健やかな土地には、健やかな民族がある。幸いに、私達夫婦も息子夫婦も、同じ学舎で学び、知り合い結婚しました。我家の牧場をやっていくうえでの哲学になっていると、講演にむけての資料作りをしながら、改めて思いました。

ふるさと講座に参加された町民の皆さんが、こういう乳牛の飼い方もあるのだと知っていただけただけでも、講演をして良かったと思います。

農業に定年はありません。「死ぬまで現役」と言っておられたのは、本州の農協女性部の高齢の部員さんでした。60歳間近の今は、子牛の哺乳と畑の管理・朝夕の孫の世話です。これからも体の続く限り、家族の中での役割を果たし、息子夫婦の手助けをしていきたいと思っています。

梅田さんをはじめスタッフの皆様、教育委員会の杉森さんの「ふるさと講座」への熱い思いに触れ、いい経験をさせていただきました。ありがとうございました。そして、資料作りなど大変お世話になりました。

これからのふるさとから学ぶ会のご発展を、心よりお祈りしています。

(北兵村三区在住 松浦三代紀 酪農家)

<参加者に渡された資料より> -----

<湧別町の酪農～戸数・133戸、生乳販売額・103億円(平成30年度)>

○酪農家戸数		・経営規模			
		<乳牛(親牛、仔牛を含む)>		<搾乳牛(親牛)>	
〔生乳出荷農家	125戸	1～49頭	25戸	1～29頭	10戸
	〔育成農家	8戸	50～99頭	46戸	30～49頭
〔個人経営		116戸	100～199頭	41戸	50～79頭
	200～399頭		12戸	80～99頭	15戸
〔法人経営	17件	400～599頭	3戸	100～199頭	14戸
		600～799頭	5戸	200～399頭	4戸
		800頭以上	1戸	400頭以上	4戸
		合計	133戸	合計	125戸

(平成31年2月現在、湧別町農政課調べ)

お忙しい中、講師を引き受けてくださり、「酪農の町・湧別」のあゆみ・実態を分かり易く、また、日々携わっている酪農への思いを率直にお話しいただいた野田さん、松浦さん、増田さん、友澤さん、ありがとうございます。

参加された方から、「様々な観点から学ばさせていただいた」(50代男)、「非常におもしろかった」(70代男)、「とても有意義な時間でした」(60代男)などの声が寄せられました。

「休憩時」には、JAゆうべつ町様、計呂地の中谷牧場様のご好意で、とってもおいしいヨーグルトをごちそうになり、湧別の豊かさも味わいました。

皆様のご協力により、充実した講座になりました。ありがとうございます。全面的なご支援をいただいたJAゆうべつ町様、友澤組合長様、心から感謝申し上げます。(梅田)